
哀音の詩

綾瀬メグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀音の詩

【Nコード】

N1740BA

【作者名】

綾瀬メグ

【あらすじ】

灰原哀が、宮野志保の頃

彼女が”黒”に染まるより前から、コナン達に出会うまでの物語。

あの時確かに存在していた、宮野明美と・・・”春”。

そして奏でられる、哀しい別れの詩。

雪音（前書き）

明けましておめでとございませう！

新連載始めました（っ、っ）暇潰しに読んで貰えると嬉しいです

綾瀬

雪音

もう夢でしか逢えない。

初めて出逢った日の、木漏れ日の中の優しい笑顔。

灰雪が舞うあの日、別れを告げた貴方の声

”此処から生きて出られたら……”

……笑ってよ”

恋人ではなかった。

けど、只の友人なんかじゃなかった。

他人を拒み続けた私の、こころを溶かした人。

あの人は……

私の

哀音の詩

「……ちょっと。いつまでも此処に居る訳にはいかないのよ?」

仁王立ちで佇む私の前には、雪まみれの小学生が4人。

その全員が鼻の頭を真っ赤にして、握りしめた雪玉を未だに離そうとしない。

「だってよ…まだコナンに勝ってねえし！」

「そうですねよ！やられっぱなしじゃ帰れません！」

「……………まったく。今日は博士の家で夕飯食べるんじゃないの？
提案した貴方達が忘れてどうするのよ。さっさと帰らないと」

言いかけた瞬間……………ほんの少しだけ襲った、目眩。
考えなくても原因は明確だった。

(やっぱりガラにも無い事するんじゃないやなかったわね……………)

「灰原？」

「……………江戸川君、貴方も忘れたの？今日、彼女も手伝いに来るんで
しょう？」

「え？……………ああ、そうだな」

会話しながらも、体と意識が徐々に離れていく。
工藤君にも子供達にも、余計な心配はかけたくない。不思議そうに
顔を覗き込んでくる彼に気付かれない様に、火照る顔を逸らした。

「オメーら、そろそろ帰ろーぜ？続きは明日でいいだろ？」

「「ええ」……」

「心配すんなつて。この雪なら、明日も遊べる位は積もってっから」

都会では珍しい降雪。

子供達が遊び足りないのは仕方ない。

私さえ、年に数回しか出逢えないこの景色には自然と心が弾むものだから。

彼等を諭して帰路に着いたのは、もう17時を過ぎた頃。

完全に陽は落ち、辺りは暗くなる。

一定の間隔で並ぶ街灯が、幻想的に照らし出している
足跡の無い、青白い世界。

いつもの街並みが一変して映る。

踏み締める度に、さくさくと奏でる5人分の足音。

「今日はカレーかな！」

「歩美、蘭お姉さんのカレー大好き！」

白い息を吐きながら、冷えた手を吐息で暖めながら、それでも変わらず元気な子供達。

その姿を見つめながらも、会話は頭に入らなかった。

時間が経つほど鈍くなる意識の中、深々と降り続ける雪の音を聞いた。

あの日も、雪だった。

忘れられない。

小さなダストシユートから抜け出し、最初に目にした光景。

都会から隔離された組織のアジト。

視界一面が真っ白に塗りつぶされていた。

躊躇う事無く、裸足のまま駆け出した。

幼児化した体の熱と激痛。

涙でぐしゃぐしゃに濡らした顔と、両手にべったり付着した鮮血

目的地は米花町だと決まっていた。

同じく幼児化しているであろう”工藤新一”を頼る為に。

彼に会って何を言えばいいのか、なんて考えられなかった。

只、どうしても。

生きたかった。

頭の中でリフレインする、あの人の言葉

”死にたい、なんてさ。言う資格なんか無い”

今まで何人があの毒薬で命を落として来たのか、知らなかった訳じゃない。

自分勝手なのは私が一番よく理解している。

だけど私は、決めたのだ。

死にたい、居なくなつた方がいい……そんな言葉じゃなくて。

生きて、此処に居て……一生償う事に。

博士が扉を開けると同時に、美味しそうなカレーの香りが漂つた。子供達は着くなり大はしゃぎで、早く食べたいだの先に着替えるだの、騒がしく討論しながらリビングへ駆けていく。

いつもは呆れながらも微笑ましいその光景も、今はどうでもいいと思つてしまつ位に体調は悪化していた。

「おお哀君、おかえり。君まで雪だらけで遊んでくるなんて珍しいのう」

「……博士。私、夕飯は後でいいわ」

「え？」

「彼女には悪いけど……今は食欲無いの」

「あ、哀君？」

理由を聞いたそうな博士の声を背に、自室に向かった。部屋着に着替え、電気は付けずにパソコンを起動する。

暗闇の中、ぼうつと光る四角いスクリーン。

解毒剤のデータが入ったファイルを開き、羅列する記号を眺めた。

完璧な解毒剤を作るためには、やっぱり足りない。

今のままでは元の体に戻れても精々24時間、しかも身体への負担は免れない不完全な物しか作る事が出来ない。

それが今出来る精一杯。

もどかしくて、どうしようもなくて。

（一体いつになったら）

頭を抱え、やり場のない苛立ちに溜め息をついた。

”……大丈夫、だよ。また必ず逢えるから”

「……………」

どうして、今日はこんなにも思い出してしまうんだろう。
あの時以来の雪のせいだろうか。

ふいにパソコン画面が霞み、強い眩暈に襲われる。

(やば……………本格的に風邪、かも)

視界がぐるぐる回転する、気持ちの悪い感覚に酔いそうだ。
パソコンを閉じ、ベッドへ仰向けに倒れ込む。

真っ暗な部屋の中、手探りで右手を延ばした。

子供の姿をしている今の私には少し大きい、赤いヘッドホン。それを耳に当て、再生ボタンを押す。

深く目を瞑り、流れてくる音楽に耳を澄ました。荒くなる呼吸を、ゆっくりと整えながら。

「……どうして、また独りにするのよ」

こんなに美しく、哀しい旋律を残して。

溢れ出る涙を、手の甲で拭った。

「博士。私、哀ちゃんの様子見てくるね」

「すまんの……蘭君」

「蘭姉ちゃん、僕も行くよ」

いつの間にか眠っていたのかもしれない。
遠い遠い何処かで、聞き覚えのある声がする。

その言葉の意味を理解出来るほど、意識ははっきりしていなかった
けど……

「……哀ちゃん、寝ちゃってるみたい」

「さっきから、何か具合悪そうだったんだ」

誰かが温かい毛布を掛けてくれた。
その直後、額に触れた優しく冷たい掌。

「うーん、本当に熱があるみたい。後で夕飯と風邪薬、持ってこようね」

「そうだね……って灰原、音楽聴いたまま寝てる。これ……クラシック？」

「あ。この曲……」

「知ってるの？」

「うん。有名な曲よ。コナン君は知らない？」

「え？えっと、音楽はちょっと……」

「本当そういう所、まるでアイツみたいね」

「哀しくて、美しくて。この曲はね……」

夢を見ていた。

お姉ちゃんが居て、私が”黒”^{シエリー}に染まる前。

私はあの時、確かに出逢ったんだ。

暖かくて、優しくて。

あんなにも哀しい

”春”に。

噪音

”disgusting”

メモを見ながら佇んでいた。

もう、慣れた。

何かを隠されたり壊されたり、聞こえる様に囁かれる陰口にも。
足を掛けられ、転ばされるなんて日常。
下劣な英語で落書きされたロッカーも

その度、喉元までじわじわ侵食してくる嫌悪感を呑み込んだ。

”……キモチワルイ”

ここに存在するニンゲンという腐り切った物体が。

身体は拒否反応を示してる。
全て吐き出そうとしている。

けど、そんな事すらもう面倒だった。

そんなに私が憎いなら

殺せばいいのにね。

誰かを”自分より下”だと扱い”仲間外れ”が大好きで、優越感に浸る生物。
そんなモノ、もう消えて無くなればいい。

私の中の 何かが壊れてしまった。

2 (雑音)

『 志保？久しぶりね！ 』

姉から電話が掛かって来たのは、帰宅してすぐだった。
懐かしくて優しい声に、思わず目を細める。

『 大学はどう？ 』

「 それなりにやってるわ 」

『 そっか 』

母親譲りの髪や、瞳の色。
父親譲りの東洋系の容姿。

只でさえ目立つのに、飛び級で入学してきた” ナマイキ ” な女が受
け入れられるはず無い。

おまけに「 社交的 」とは正反対の性格。

何処へ行っても同じ。昔からずっと。

「それで？」

『……父さん達の事。すぐに私から連絡したかったんだけど、ごめんね』

「……別に気にしてないわ」

私は独り家族と離れて暮らしている。

両親は揃って科学者で、2年前に姉だけを連れて日本へ行ったきり連絡は無かった。

どうして私だけ連れて行ってくれなかったの？

そう恨んだ日もあった。

だけど今になっては、ふいに頭を過る事すら無かった存在。

いつも多忙で遊んで貰った記憶なんて無かったし、”家族”と呼べるのかすら曖昧だった。

だから数週間前、彼等の「事故死」を聞かされても何の感情も湧かなかった。

『志保、貴方は本当にいいの？』

「構わないわよ。こっちの生活にも飽きた頃だし……大学だって、面白くも何ともないし。」

声を掛けてもらえなかったら、退学してたかも知れない」

唯一の取り柄である勉強で、15歳で大学へ入学した。夢や目標なんか無かったから、とりあえず両親と同じ科学者を目指して。

”ご両親の研究を、引き継いで頂けませんか？”

だからあの話を聞いた時、即答した。もしかしたら、やっと自分が必要とされる時が来たんじゃないかって……

「お姉ちゃんと同じ職場なんでしょう？断る理由なんて無いわ」
『でも……』

喜んでくれると思ったのに。何故か言葉を濁した姉に対し、ほんの少しだけ疑心暗鬼に陥る。

”……私と、会いたくないの？”

思わず言いかけた言葉を、固く口を結んで呑み込んだ。

いつから姉にまで、こんな汚い気持ちを向ける様になったんだろう。

虐められたと聞けば私の教室まで怒鳴りこみ、守ってくれた。いつも不在の両親の分まで一緒に居てくれた、唯一の大切な人なのに。

『……志保。父さん達が何の研究をしていたか聞いたの？』

「詳しくは、まだ」

『……そう』

「……おねえ、ちゃん？」

”来るな”、って？

沈黙が怖い。

無意識に唇を噛み締め、携帯を持つ手が小さく震えていた。

『志保、あのね。父さん達と私が働いているのは』

「…………え？」

ようやく紡がれかけた言葉は、また途切れてしまう。

じっと耳を澄まして恐る恐る続きを待った。

携帯の向こう側で、微かに呼吸が乱れた気がする。

『…………何でも、ない。明後日、空港まで迎えに行くからね。志保に会えるの楽しみにしてるわ』

予想していた答えとは正反対だった。

急に明るい声で、何事も無かった様にそう告げられる。

気のせい…………かも知れない。

声が、震えていた。

「……言う通りにしたわ。これで満足？」

志保との会話を終え、目の前に佇む男
全身黒づくめの”死神”を睨んだ。

「相変わらず汚いわね」

「……テメエ自分の立場分かってんのか？」

威圧感のある大柄な体格と、癖のある煙草の臭い。

漆黒のサングラスで表情は読めない。

こいつが現れる度、身体に植え付けられた嫌悪感で吐き気がする。

「ええ、もちろんよ……ウオツカ。それと」

両手を上げて降参のポーズを取りながら、微かに後ろを振り向いた。

後頭部に当てられた拳銃

銃口を向けられてからずっと、背後に静かな殺意を感じていた。

強がりで作った笑顔は強張り、震える。

身体を中心に、どろどろした冷たいものが通過していく。

怯えてる、なんて奴等に勘づかれたくない。

そのプライドだけが、無理矢理私を奮い立たせた。

「……君も。そろそろ拳銃^{それ}、降ろしてくれない？」

精一杯振り絞った言葉に、”彼”の返答は無い。

引き金に掛けられた指も緩む事は無く、穏やかな微笑みを浮かべる
漆黒の瞳。

突きつけられる、”死”という絶対的恐怖感

まるで死刑台に立たされた罪人。”此処で死ぬ”と、受け入れざる
得ない。

”彼”から感じる”何か”がそうさせる。
それは気のせいなんかじゃない。

「宮野明美そいつにはまだ死なれてもらっちゃ困る。大事な”仕事”が控
えてるんだぜ？」

「……ああ、そうだった」

ようやく”彼”は納得した様に、その銃口を逸らした。

金縛りが解かれた様に、身体から力が抜ける。

本当は立っているのがやっとだった。

どうせ組織こいつらには、いずれ消される。

両親の事故だって仕組まれたモノに決まっている。

いくら組織の為に働いたって結末は同じ。

使い捨て。

不要になればDelete（消去）。

こんな奴等に屈するなんて……

本当の部下に成り下がるなんて、殺されるよりも嫌だった。

「 だってさ。ゴメンね」

「……それ。貴方コトモみたいな未成年が、遊びで持っていていいモノじゃないんじゃない？」

明らかな嫌みを込めて言い放つと”彼”は目を丸くして、珍しいものでも観察する様に私を見た。

「コドモ……?」

きよとん、とした表情でそう言って、ほんの数秒前とは別人みたいに微笑む。

「そんなに年齢、変わらない気がするんだけどな。宮野さんって面白いね」

「……褒め言葉として受け取っておくわ。それで、今回は何?」

だから余計に恐怖を抱いた。

この場所には余りにも不似合いな”普通の少年”。

慣れた様に拳銃を手にし、ついさっきまで人を撃ち殺そうとしてたのに……あどけない笑顔と優しい口調で話す”彼”に。

「あの方からの”仕事”だ」

「……殺人ならお断りよ」

「銀行強盗」

「……何、ですって？」

「10億円……それと引き換えに妹とテメエを抜けさせてやる」

「そ、そんなこと……」

ウォツカの放つ言葉の意味が、すぐには理解出来なかった。

……強盗？10億？

そんな大金、想像すら出来ない。

組織（こく）で数年働いていたとはいえ、元は普通の女子大生だっというのに。

「相棒と運び屋は手配してやる。計画はテメエ等で立てろ」

「ちょ、ちょっと待……………」

「やるか、やらねえか。今此処で決めな」

「…………断つたら?」

「妹の飛行機が無事に日本に着陸する保証はしねえぜ」

理不尽な脅迫。

高圧的な態度で提案されるそれには、結局選択肢など皆無だ。

……………父さん。母さん。

私、は。

決行は数ヶ月後。

10億なんて大金を手に入れる為に、その準備期間が長いのか短いのかすらも分からない。

”約束”が守られる根拠なんか何処にも無いのに。ただ、これが私に残された最良の選択だった。

「……貴方も、早く行ったら？」

私の返事を聞くなり早々に立ち去ったウォツカに対し、”彼”はまだ此処に居た。

「どうして決めたの？素人が強盗なんてさ」

「……妹と、自分自身の為よ」

「そんなに大事なんだ」

「そうよ。妹には手出しさせない　その為なら何だってやるわ」

爪が突き刺さる程強く掌を握り、ゆっくりと俯いた顔を上げる。睨みつける私を見て、”彼”は不思議そうに首を傾げた。

「……ねえ、宮野さん。どうしてこの”仕事”なのか分かる？」
「え？」

「^{ライ}諸星大”」

「……………!!」

「宮野さんは組織の情報を漏洩させた危険因子扱いなんだよ。強盗が成功したら10億入るっていうだけだし、失敗したらそれを口実に消される。どっちにしる殺されるよ」

「……………」

「本当は分かってるんだよね？」

……………そう。

理解している。

奴等の考える事なんて……………

只　私が”それ”を受けなかったら、確実に志保は殺されていた。

「……………もし、本当に消されるとしても」

決断を迫られた時、真っ先に浮かんだのは志保だった。

彼女が生まれてからずっと、一番近い存在。

昔から素直じゃないし内気だし、友達の少なかった志保。

だけど本当は、明るく笑える子。

思いやりがあつて、弱いところを見せない優しい子。

守っていた様で、私も彼女に守られていた。

私の可愛い、たった一人の妹。

「妹が笑顔で居られるなら構わない。それが姉妹なのよ」

「……理解出来ないけど。嫌いじゃないよ。そーゆーの」

……大丈夫よ、志保。
私が必ず守るから。

主音

「お帰りなさい、志保」

「ただいま」

離れて暮らしている間に成人した姉は、すっかり大人びている。腰まで伸びた黒髪のロングヘアと、黒いスカートのスーツがよく似合っていた。

少し痩せた所為かもしれない。
太陽みただった眩しい笑顔だけが、何処か曇って映った。

「着いたばかりだし、ゆっくり休ませてあげたいけど……ゴメンね。急遽”職場”を案内する事になっちゃったの」

「平気よ。両親あのひと達がどんな研究してたのか、私も興味あるし」

「じゃあ行くっか」

「ねえ、お姉ちゃん」

両親の突然の事故死。
唐突な日本への招待。

違和感の正体はきっと、この不自然な歯車のせい。

「……何でもない」

この先待ち受けているのが何であろうかと

私にはたった一人。
お姉ちゃんしか居ないから。

「……」

「そう。まずは”仕事”の説明を受ける事になってるわ。少し待ってて？」

空港からタクシーに乗り、辿り着いた先は小さな診療所だった。鮮やかな緑が生い茂る立派な庭。住宅街から離れた広い土地に、ぽつんと佇んでいる。

手動のガラス扉を開けて中に入ると、すぐに待合室と受付が目に入った。

規則的に並ぶ背もたれのない黒いソファーに、窓から斜めに差し込む暖かい日だまり。アナログテレビが映し出すニュースの音。

どこか安心する、懐かしい空間。

こんなに穏やかな気分はどれくらい振りだろう。

本来なら今頃大学の授業中。
退屈な授業とあの空間の中、ただじっとして其処に存在しているだけだった。

やっと開放された。もう戻りたくなんてない。
あのまま居たら、私は跡形も無く消えていた。
少しずつ”当たり前前のこと”が理解出来なくなつて、破壊されて。

(あつ！ねえ、ニュース見て！)

よほど暇なのか。
受け付けの若い女性が二人、テレビに釘付けになっている。

『 ”高校生探偵”、難解事件を解決！』

その見出しと共に、濃紺の制服を着た男の子がインタビューを受けている。

沢山のマスコミとフラッシュに囲まれ、なんとなく自分と正反対の世界だと思った。

『 若干16歳の高校1年生が、見事飛行機内での殺人事件を解決しました』

『 多くの未解決事件が存在する中、日本警察の救世主が誕生ですね』

何処かのスタジオで、彼を褒め称える司会者達。

（まさかあ。ほら、”工藤新一”だって）

本人達は小さな声で呟いてるつもりだろうけど、はっきり言って全て聞こえている。

頭脳明晰。

ステキ。

格好良い。だの何だの。

私には不快でしか無い。

冷め切った視線を送っても、彼女達の視線は揺るがなかった。

下らない。

大きく溜め息をつき、待合室を後にした。

自動販売機でコーヒーを買い、横に設置されたソファ―に腰掛ける。

いつも飲んでいるそれより安っぽい香り。

薄くて美味しいなんて到底思えない。

それでも、心の中で渦巻いていたものが浄化されていく。

何となく窓から光が差した気がして

顔を上げると、ふと「それ」が目に入った。

瞬間、全ての音が遮断された。

話し声。ノイズ交じりのテレビの音。

窓の外、小鳥のさえずりや風の吹く音。

全てが、消えた。

コーヒーの熱さも忘れ、紙コップを握り締めた。
視線を逸らす事が出来ない。

其処には、小さな絵が掛けてあった。
只それだけなのに。

たった30cm四方の平面に描かれた小さな世界。

水平線の様な、空の境界線の様な、雲と雲の切れ間の様な
幾度も重ねられた、「線」。

雪の様に真っ白な空間に、蒼や紫など、繊細で様々な淡い色調が広
がっている。

胸が締め付けられる。

哀しい。切ない。苦しい。美しい。

この気持ちがどれに当てはまるのかは分からないけど

「あつっ……!!」

歪んだ紙コップから溢れたコーヒー。
膝と指に感じた熱で、急に我に返った。

「綺麗よね。その絵」

いつの間にか姉が目の前に佇んでいた。
笑いかけながらハンカチを差し出している。

何となく恥ずかしくなって目を逸らしながら、それを受け取った。

「私も此処へ来る度に眺めるの。素直に素敵だなあって思えるから」

「……そうね。芸術にはそこまで興味無いけど、この絵は綺麗だと思っわ」

「志保には何に見える？」

その問いかけに、もう一度見詰めた。

笑顔の姉と絵を見比べ、思わず言葉に出たのは。

「……海」

「やっぱり？私も昔、唯一家族で行った海を思い出すの。志保は小さかったから覚えてないかな」

「……わからないわ。あつたのね。そんなこと」

「父さん達との思い出、少ないものね」

仕事ばかりだったから、と姉は苦笑いした。

茶色い染みが付いた白いハンカチを握りしめながら、思わず俯く。こんな気分になるなんて自分でも不思議だった。

「失礼します」

「どござ」

一番奥の、隔離された様な部屋。
入るように促され、何となく身構えて一步踏み出した。

中にはベッドがひとつ。
そこに眠っている女性。

医療器具以外何も無い部屋に、黒いスーツを着た老人が立っていた。

「志保、私は待合室で待つてるから。それじゃあよろしくお願いします」

姉はそう言い残し、ゆっくりと扉を閉める。

開け放たれたカーテンで逆光になった老人の表情は読めなかった。

「志保君だね？どうぞ掛けてください」

「……………どうも」

居心地の悪い空間。
早く抜け出したい。

「さっそくなんだが。君の”仕事”について説明しよう」

「……………」

「君の両親が進めていた、そしてこれから君が引き継ぐ研究で……この女性を助けて欲しい」

老人の視線を追って、女性を見た。

整った容姿。色白の肌に、綺麗な黒髪。
年齢は20代くらいだろうか。

眠っている様にしか見えないのに
聞こえるはずの微かな呼吸は聞こえなかった。

主音・2

「相変わらず、素敵な絵」

扉を開くと鼻につく油絵の具独特の香り。

視界に入るのは壁一面の大きなキャンバスと、床に散らばる様々な色彩のチューブ。

「……来てたんだ」

「ええ、ついさっき」

少年は面倒臭そうに、ヘッドホンを外して首にかける。
絵の具だらけの黒いツナギで両手を拭った。

ドアに寄りかかり、腕を組むのは 妖しげな微笑を浮かべた金髪の女。

目を合わせず不機嫌そうに筆を置いた少年。

”邪魔して悪かったわ”と女は軽く肩をすくめた。

「綺麗な旋律……Frederic Chopin、ね」

「なんの用？」

「面白い話を聞いたから」

「わざわざ此処まで来る程の？」

「ええ。とびきりのnews」

彼女が差し出したのは新聞。

一面を飾るのは、一人の高校生だった。

「工藤新一」、帝丹高校の1年生。最近脚光を浴びてる”高校生探偵”」

「くどう……しんいち？」

「忘れた訳じゃないでしょう？」

首を傾げた少年は、数秒後に目を見開いた。
女はその様子を何処か楽しげに見詰めている。

「……………」

「思い出した？やっぱり何処か貴方に似てるわね」

「……そんな訳ないよ。此処が漆黒の闇なら、あっちは光なんだか
ら」

「変わらないわね。そんなにあの人が嫌い？」

その質問に、じっと見詰めてから目を逸らした。
自嘲した笑みを浮かべた彼は、答えない。

「まあ一応期待しとこうかな」

「我々の心臓を撃ち抜くシルバーブレッドとして、かしら」

言いながら、遠くを見たような女の目は切なげだった。

長い、長い夢を想い出すかの様に

「……早く、終わればいいのに」

消えてしまいそうな彼の呟きに、女は”そうね”とだけ答えた。

4 (主音・2)

要は、死んだ人間を生き返らせる。という事。

常識で考えたら絶対無理。

そんな非現実的な話を真面目な顔して話す老人のアタマを疑った。

でも、あの女性を見た時　鳥肌が立った。

どう見ても眠っている様にしか見えない、綺麗な身体。生命感溢れる、ほんの少しピンクがかった頬。人形の様な艶やかな黒髪。

”彼女が亡くなったのは、約20年前です”

つまり、彼女の身体は時間が止まっているのだ。

両親よりも前の世代から引き継がれて来た研究によって、この世から”生”を失ったその時から。

信じられないけど、すでに常識なんて覆される状況が起きてる。

頭を過ぎったのは意外にも「やってみる価値はある」という決意だった。

「志保、あの頃の父さん達と同じ顔してる。科学者の顔」

待合室で落ち合ったお姉ちゃんは、何処か嬉しそうにそう言っていた。
「あんなに恨んだ」両親と同じ」なんて納得いかないし癪で、顔を逸らした。

「お姉ちゃんはこれからどうするの？」

「しばらく忙しくなりそうなの。大きな”仕事”が入っちゃって、その準備でね」

何の？

聞こうとしたのに、言葉にならなかった。

私の”研究”だって

死者を蘇らせようなんて、はっきり言って正気の沙汰じゃない。

科学者という職業自体、何処か世間とは離れている気もするけど。

姉の”シゴト”も同じなんだろう。

そしてたぶん、一步踏み出したら

もう後戻り出来ない。

「心配しないで？たまには会いに来るし、志保に何かあったら私が守ってあげるから」

ふいに立ち止まり、振り向いた姉の笑顔はあの頃と同じで太陽みたいに眩しかった。

例え後戻り出来なくても

私にはもう、戻る場所なんて無いから。

お姉ちゃんと同じこの場所で、少しでも誰かに必要とされるなら
なんて

淡い希望を抱いてた。

……まだ、知らなかったんだ。

その一歩で、全てを失う漆黒に引きずり込まれるなんて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1740ba/>

哀音の詩

2012年1月15日06時47分発行